

臨燈の丘



時代の移り変わりとともに万博に求められる社会への影響も変化してきている。万博は今や昼間だけにとどまらず、夜間ひいては滞在型といった形態も存在し得るのではないだろうか。本提案では夜間の利用に視点を当て、滞在型万博を受け入れるグランピング施設を、大阪湾の魅力である「光」を手掛かりに提案する。

■夢洲周辺の地形

夢洲が位置する大阪湾は2つの湾口をもち、明石海峡を挟んで播磨灘に紀淡海峡を通じて紀伊水道、太平洋に繋がっている。水源は淀川が主で、大阪湾を囲うようにして大阪平野が広がり、その背後には和泉山地、六甲山脈が連なっている他、大阪から見て対岸には淡路島があり、閉鎖的な地形となっている。湾の東側は遠浅であり、江戸時代から現在に至るまで埋立地化が進められてきた。夢洲はその人工島のうちの1つであり、周辺の海底はおよそ10mほどである。



■大阪湾の土地利用と夜間光

夢洲をはじめとする大阪湾東部地区の埋立地の利用を分析したところ、工業用地、湾岸関連要地、埠頭用地の順に面積の割合が高く、一番多い工業用地の割合は36%であった。これらの工業用地は兵庫県にかけて(阪神工業地帯)、大阪湾に沿って続いている。NASAの夜間光の図(右図参照)を見てもわかるように、夢洲から大阪湾を見渡したとき広範囲に渡って光の帯が連なっている。

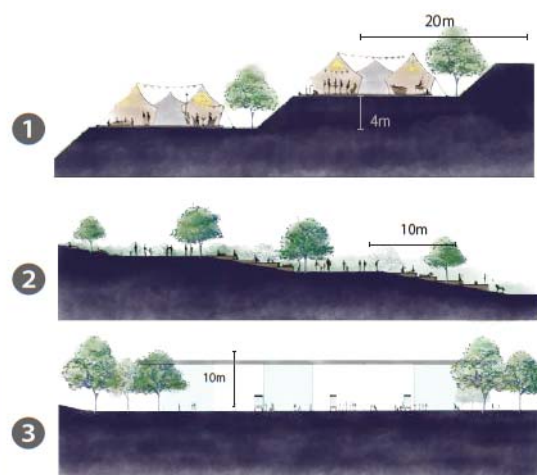


■デザインダイアグラム



大阪湾岸の光の軸を夢洲に引き込み
夜間の視線を対岸へ誘導

■詳細断面図

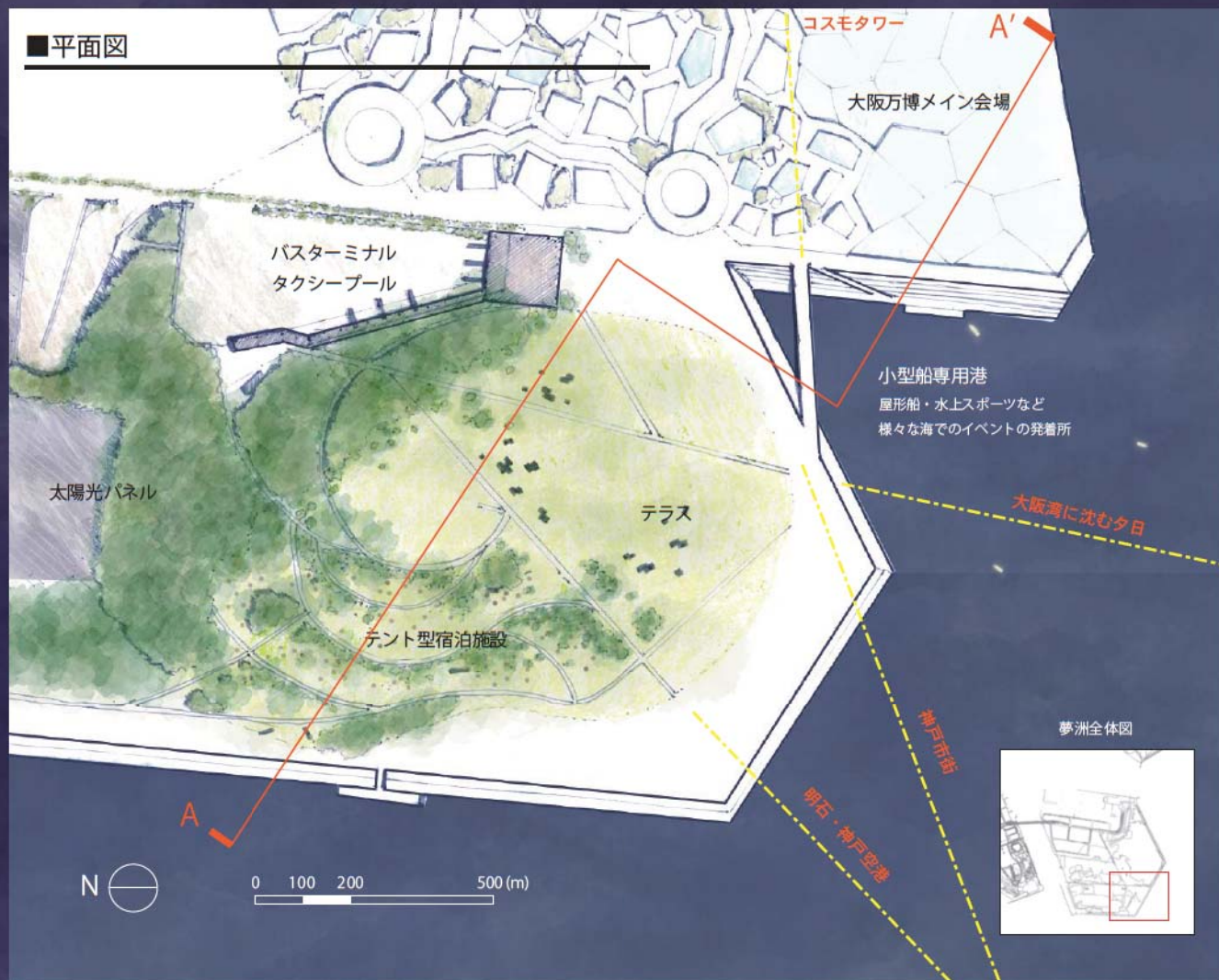


宿泊施設の形態はデッキ+テント型で、大ききの違いにより1人用から家族向けまで対応できる。柱に沿ったテラス状は配置することにより、視覚的なプライバシーの確保をするとともに、聞こえてくる喋り声や料理の匂いなどで適度にお互いの存在を認識する。大阪湾の先に六甲山と麓に広がる神戸市の街並みを鑑む。

東方向に向かって芝生のなだらかな傾斜が続く。他方向へまっすぐと伸びる歩道はそれぞれ大阪湾の別荘のまちの趣をとる。斜面の中間にはテラス状のデッキが差し込まれており、万博会場を眼下に臨み、その先の工業地帯、そして和泉山地へと視線がゆっくりと移動してゆく。

バスターミナルとタクシープール、そしてスロープを降りた先の小型船専用港があるこの広場は、大阪万博のメイン会場と臨む丘上の結露点でもある。海の上で行われるさまざまなアクティビティの先に、眺望島を鑑む。夕方、海にかかる橋の上から西を向くと大阪湾に夕日が沈んでゆく。

■平面図



■A-A' 断面図 S=1:1000

